



「USA Collegiate Championships」で2年ぶりに優勝したGarnets。
メンバーの笑顔が弾けた

「勝ちたい」 全員の強い思いが結実

「USA Collegiate Championships 2026」で優勝

ソングリーディング部「Garnets」



☆中央大学ソングリーディング部 「Garnets」

2008年創部。村田麻里コーチ、梅園茉優主将。チーム名の愛称は村田コーチの誕生石から命名。2023年に初めて男子部員が入部し、「Garnet Girls」から改名した。

- ▶ 4年生 = 久保井七豊 小町美空 小澤茉侑
 ▶ 3年生 = 青木美咲希 牛嶋さやか
 梅園茉優 小川奈乃春 高橋結里
 瀧和花 土谷紗蘭 寺田楓
 中井さとよ 平井愛海 宝達優苗
 ▶ 2年生 = 小山内くるみ 勝田美鈴
 大越優来 中村蒼 井口梨花
 井上茉佳 小池七菜 杉林美緒
 ▶ 1年生 = 佐藤千紘 音谷せり菜 山口遥
 大屋いずみ 川下雫 中野美鈴
 石川史華 立花優香 原千尋
 岩脇ひなた 三好ひなた
 中村沙知 溝井陽梨 田野陽菜
 藤關光希

※学年は2026年度の表記



チアダンスの国際大会「USA Collegiate Championships 2026」（2026年2月21、22日、米国カリフォルニア州アナハイム）の「Pom 4-Year College」部門で2年ぶりに優勝したソングリーディング部（愛称・Garnets＝ガーネッツ）。主将の梅園茉優さん（商3）、副主将の高橋結里さん（経済3）は「大会での優勝をイメージして練習に励み、メンバー全員が勝利への意識を強く持っていた」と勝因を挙げ、「夢のような時間だった。夢見心地の気分になりました」と、目標とした大会で新チームとなって初めてつかんだ栄冠を振り返った。

（ステージ上や表彰セレモニーでの写真はすべてソングリーディング部提供）

2分間「演技の激しさ」前面に

2分間の演技で大切にしたいことは、「いかに魅せるかというショーマンシップ」(高橋さん)だった。日本国内の大会よりステージと客席が近く、観衆とのアイコンタクトも意識したという。1970～90年代のロック音楽をリミックスした楽曲に乗り、首を激しく振ったり回したりという特徴的な振り付けや、Garnets 史上初の男子選手である久保井七豊^{ななと}さん(法4)をリフトで高く引き上げるなど、演技の激しさを強く打ち出した。

予選と決勝の2回の演技中、個々の観衆の反応をみる余裕はなかったものの、梅園さんは「客席全体が Garnets のチームの色に染まり、見入ってくれている」と感じたという。「表情もシンクロさせて、迫力を生む」(高橋さん)という演技が観衆の心をつかんだ。

村田麻里コーチの言葉もステージに出るメンバーの支えとなった。緊張すると音楽(楽曲)より早いテンポで踊ってしまいがちになるため、演技直前に「音をしっかり聴くこと」

とアドバイスされ、背中を押して送り出された。梅園さんは、「決めてくるんだよというコーチの言葉が心強かった」と振り返った。

「アメリカで優勝」「GGを極める」

2025年8月のチアリーディング&ダンス選手権大会で2位に入り、今回の国際大会の出場資格を得た。それ以来、メンバー全員が「アメリカで勝ちたい」と目標に定め、多摩キャンパスの第一体育館やほかの体育館で練習する際は、「アメリカで優勝」「GGを極める」と決意を記した模造紙を壁に貼り、練習の最初に必ず組む円陣でも意識を高めた。GGは「Garnet Girls」の略で、久保井さん所属前のチームの愛称だ。

チーム競技であるチアダンスの魅力について、「チームの仲の良さも演技から見えてくる。テクニックの組み合わせやスキルを工夫したりと、チームカラーが表現される」と、梅園さんは話した。決して楽をするという意味ではなく、チアダンス本来の「楽しい」を大事にするのが



取材に笑顔で応じる主将の梅園茉優さん(右)と副主将の高橋結里さん＝多摩キャンパス

ソングリーディング

肩に人を乗せるなどのアクロバティックな動きは禁じられている。見どころは、体のターンやジャンプなどチアダンスとしての技や動きの切れのほか、片方の足を伸縮させながらもう片方の足を軸に全員でそろって回転するクラシックバレエの動き「フェット」など。

☆ USA Collegiate Championships

USA (Untied Spirit Association) は、チアリーディング、チアダンス競技の指導・育成・普及団体。本部は米国西海岸。Garnetsが優勝した Pom 4-Year College 部門は、楕円形のポンポンを使うチアダンスの4年制大学の部門の意味。アップテンポな楽曲をBGMとして、2分間の演技の中で、振り付け、技の難易度、ショーマンシップ、画一性、フォーメーション(隊形)など8項目について4人の審査員が評価した。

夏のチアリーディング&ダンス学生選手権大会(USAジャパン主催)、秋の全日本チアダンス選手権大会(日本チアダンス協会主催)、冬のUSA Regionals(地区大会)とUSA Nationals(全国大会)、グランドファイナル(日本チアダンス協会主催)と並んで、Garnetsが目標としている大会である。

Garnetsというチームで、「3時間半の練習があつという間に終わってしまうような楽しさ」を目指してきた。

チアダンス本来の楽しさを

2025年4月の新チーム結成後、とくに秋から冬にかけて、この「楽しい」というチーム像を実現できず、さらに主要な大会でも思うような結果を得られず、梅園さんは気分がふさぎ込んだ時期があった。高橋さんも「うまくいかない、もどかしさから逃げ出したいような感覚があった」と苦しかった頃を振り返った。

Garnetsはメンバーが意見を出し合い、良い意見なら学年の隔てなく取り入れるという柔軟性をもったチームであることが強みだ。メンバーがそれぞれの役割を全うして、支え合って演技は完成する。梅園さんと高橋さんは結果が出ないことに責任を感じながらも、「勝ちたい」という強い思いを頼りに苦しかった時期を乗り越えた。

競技チアダンスに打ち込んでいた小学生の頃から Garnets の存在を知っていたという高橋さんは、広いキャンパスにあこがれて中大に進学し入部した。梅園さんも小学生からチアダンスの経験があり、国際大会の優勝は幼い頃からの夢だったという。



ステージで久保井七豊さんをリフトアップ＝米国アナハイム

取材後記

卓越した技術+チーム愛 「一人ひとりがチームづくりに関わる」 Garnetsの文化と伝統

学生記者 木村結（法4）

国際大会に優勝するまでの苦悩や大変だったことについて語る一方で、それと同じくらい印象的だったのは主将の梅園茉優さん、副主将の高橋結里さんの笑顔や生き生きとした姿だった。取材を通して、やり遂げたというすがすがしさや喜びが垣間見え、Garnetsにとって今回の優勝が本当に大きな意味を持っていることが伝わってきた。

梅園さんは、優勝決定の瞬間を「うれしさと同時に信じられない気持ちが大きく、夢のようだった」と振り返った。トロフィーを手に宿泊先のホテルに歩いて戻る途中、大勢の街の人々から祝福の言葉をかけられ、徐々に優勝の実感が湧いたという。高橋さんの「人生で一番祝福された日だった」という言葉も印象に残った。全ての努力が報われたのだらうと感じ、私もうれしい気持ちになった。

取材で感じたのは、Garnetsの強さは卓越した技術力だけではなく、「GG愛」と呼ばれるチーム愛が支えているということだ。学年に関係なく意見を出し合い、一人ひとりがチームづくりに関わる文化、伝統が受け継がれている。

大会直前までミーティングを重ね、一人ひとりの思いを共有し理解し合ったことが大きかったと、梅園さんは語った。そ

れぞれの胸の内にあった「勝ちたい」という思いを言葉にし、いわば“可視化”したことが、チーム全体の練習の質の向上、モチベーションや意識の高まりに結びつき、士気を高めてきたという。

言葉や表情から、競技への真剣さと仲間を大切にする気持ち、主将、副主将として背負ってきた責任の重さが伝わってきたが、2人は「逃げ出したいと思うことは何回もあった」とも打ち明けた。取材中、苦しかった時期を振り返ったときは、言葉に詰まりながら思いを語る姿も見られた。優勝までの道のりで、演技やチームワークなどを話し合う中で、主将、副主将として悩みも尽きなかったからだろう。

それでも、「アメリカで優勝」「GGを極める」という目標の文字を練習中の体育館に掲げ、一つひとつの課題に真摯に向き合い続けたからこそ、栄冠を勝ち取ることができたのだと感じた。互いを信じ、支え合い、同じ目標に向かって進む。その姿勢こそが、優勝の最大の原動力だったのではないかな。新たな目標を掲げ、日々練習に励む Garnets の一層の活躍を楽しみにしている。



Garnetsの迫力満点の演技＝米国アナハイム

取材後記

栄冠を勝ち取った“等身大”の学生たち 仲間と本音で向き合い、作り上げたチーム

学生記者 池田茉琴（商3）

国際大会の優勝という輝かしい実績を残したソングリーディング部。そうした偉業を達成するようなチームに対して、私はどこか遠い世界の、最初から完璧な集団であるかのようには思っていた。しかし、ここに至るまでのチームの道のりは決して平坦ではなかった。

主将の梅園茉優さん、副主将の高橋結里さんの2人は、「感情があまり表に出ないタイプ」と自身をたとえたが、チームの雰囲気をよくしようと、明るく振る舞うように努めてきたという。ただ、時にはチームメイトから「勝ちたい気持ちが見えない」と厳しく指摘されることもあり、自分らしいリーダー像を模索する日々を過ごしてきた。

「自分の感情がわからなくなるくらい、いっぱいいっぱいだった」と、梅園さんはそうした日々を振り返ったが、その言葉は私たちと同じように、より良い未来を求めて苦悩する等身大の大学生の姿にほかならなかった。チームを率いる責任、結果に対するプレッシャーが取材中の率直な言葉から垣間見えた。

高い目標を掲げる組織だからこそ、生じるあつれきや重圧は想像を絶するものがある。それでも2人は向上心を保ち、学年の隔てなく誰もが意見を出し合える関係性を築いていった。

取材中、彼女たちが「円陣」や「団結」など、チームを感じさせる言葉を何度も繰り返していたのが印象的だった。

わずか2分という演技時間のために、Garnetsはどれほどの努力を重ねてきたのだろうか。学年の壁をなくし、指先の角度だけでなく表情の細部まで全員で意見をぶつけ合い、妥協なく作り込んでいく。その道のりは一步一步強くなろうとするアスリートの歩みそのものであった。チームが真に一つになったのは、渡米後、セミファイナルの前日ミーティングだったという。張り詰めた緊張感の中で「このチームなら勝てる」という言葉が出た瞬間、それまでの重圧が解け、互いへの確固たる信頼に変わった。仲間と本音で向き合い、全員でチームを作り上げてきたからこそ迎えられた瞬間だったのだろう。

取材を終えて改めて感じたのは、優勝するようなチームも最初から特別な存在だったわけではないということだ。同じキャンパスで授業を受け、課題に取り組み、友人と過ごす。ごく普通の大学生たちが、日常の中で悩み、ぶつかり合い、ときには逃げ出したくなるほどに追い込まれながらも、仲間と向き合い続け、その積み重ねが結実した。逃げずに継続することの尊さを教わった気がした。華やかな演技の裏側にある大学生としての人間性に触れることができた取材だった。



キャプテンの決意 「最強世代を作る」

「素直さ」「誠実さ」「行動力」成長に不可欠

準硬式野球部が2026年度東都大学春季リーグ制覇

準硬式野球部が2026年度東都大学春季リーグを制覇した。2025年度秋季リーグでは苦杯を喫しており、2季ぶりの優勝。春秋リーグ戦の優勝は通算73度目となった。8月には3連覇を目指す大目標の全日本大学選手権が控えている。チームを率いる吉井愛斗主将（経済4）と、主務としてチームを支え、選手としても活躍した田中元輝内野手（経済4）に強さの秘密、今後の抱負などを聞いた。（記事中の競技写真、チームの集合写真は準硬式野球部提供）

サヨナラ勝ちで勢いに乗る

春季リーグ優勝へキープポイントとなった試合に、吉井主将は日本大との1回戦（4月28日）を挙げた。日大先発は初対戦の1年生左腕。攻略するにもデータが少なく、序盤は抑え込まれた。試合は終盤に1点ずつを取り合い、同点の九回、二塁打で出塁した高間木^{ふうが}颯我選手（文1）を吉井主将がバントで送り、村上太一選手（経済2）のスクイズでサヨナラ勝ち。吉井主将は「どちらに転んでも不思議のないゲーム」と接戦を振り返り、「勝ってチームが勢いに乗った」と力を込めた。



勝利を喜ぶ中大準硬式野球部ナイン

新チーム発足で、吉井主将は「主だったタイトルを獲得して、最強世代を作りたい」と心に決めていた。その一つが春季リーグ戦。新人戦は残念ながら敗れたものの、春の関東地区大学選手権を制し、3連覇を目指す8月の全日本大学選手権への出場権をさっさと獲得した。

「ワンプレーで流れが変わる野球は、普段からしっかり練習することが試合に生きてくる。その姿勢を4年生が下級生に示さないといけない」と考える主将にとって、田中選手をはじめとする同学年のチームメイトの活躍は頼もしい存在だ。

「チームに必要とされる存在に」

中央大学は大学準硬式野球の強豪である。高校時代に甲子園大会の出場経験のある選手も少なくない。その一人である田中選手は春季リーグ戦序盤は守備固めとしての出場が多かったが、リーグ戦が進むにつれてレギュラー内野手として活躍している。日大2回戦(5月12日)の五回、先頭打者として中前打で出塁、後続の犠打とタイムリーで生還し、チームに貴重な先制点をもたらした。このプレーで、「チームに必要とされる存在になることができた」と自信を

深めた。

田中選手は4年生の今になって、人のアドバイスを素直に聞けるようになったと語る。1、2年生の頃は難しかったが、耳を傾けられるようになった背景に3年秋から4年春まで続けた就職活動の経験がある。社会人と会話をし、コミュニケーションを図り、さまざまなことを学んだ。そして、素直さ、誠実であること、行動力の3つが人の成長を促すのに不可欠であることに気づかされたという。

自信の裏付け どこよりも豊富な練習量

吉井主将にチームの強さの秘密を尋ねると、質量ともいどの大学よりも豊富な練習量を挙げた。選手層は厚く、レギュラー争いは熾烈だ。実力主義で、全員がチームメイトに負けたくないという意識で野球に打ち込んでいる。田中選手も「もともと野球のセンスと実力がある選手がそろっていて、皆が負けず嫌いですから競争は激しい」と打ち明け、「球際の強さやスピード感、プレーへの貪欲さなど、すごく熱いチームです」と胸を張った。

夏の全日本、東都秋季リーグ戦に向けて、最強世代への挑戦はまだ始まったばかりだ。

☆中央大学準硬式野球部

部 長	柳川重規	捕 手	岡部匡十 (経済4)	佐藤汰臥 (経済2)	長野凧斗 (経済2)
監 督	小泉友哉		川原海来 (文3)	今野航来 (経済2)	村上太一 (経済2)
コーチ	新井貴博		桐島大輔 (商1)	内野玲 (商1)	工藤浩輝 (商2)
コーチ	相野七音	内野手	山口剛大 (文4)	高間木颯我 (文1)	田村颯丈郎 (商1)
投 手	三浦凌輔 (商4)		村田慶二 (商4)	清水悠利 (文1)	阿波根裕 (経済1)
	萬谷大輝 (商4)		田中元輝 (経済4)	又吉涼太郎 (経済1)	河崎広貴 (商1)
	佐々木悠真 (経済3)		吉井愛斗 (経済4)	井ノ上拳汰郎 (経済4)	本島敬大 (商1)
	齋藤舜介 (商3)		堀川琉空 (文3)	沼澤梁成 (商3)	
	川口修生 (商2)		大森燦 (商3)	山井祐希 (商3)	
	葛西陸 (文2)		佐野敬梧 (文2)	古積充 (経済3)	
				外 野 手	



吉井愛斗主将



田中元輝選手

◆ Profile

吉井愛斗主将

よいしいまなど。新潟・中越高卒、経済学部4年。167センチ、71キロ。内野手。右投げ右打ち。2年秋、3年春秋にリーグ・ベストナイン選出。将来の目標を尋ねると、「16年間、野球をやらせてくれた両親に恩返ししたい。親孝行です」と答えた。「勝つためにすべきことを常に考えている、チームにとっての『ザ・キャプテン』」と、田中選手はその存在の大きさをたとえている。

田中元輝選手

たなか・げんぎ。秋田・能代松陽高卒、経済学部4年。内野手。163センチ、67キロ。右投げ右打ち。高校3年夏に甲子園出場。高3当時は捕手で、中大でもチームメイトの三浦凌輔投手(商4)とバッテリーを組んでいた。将来の目標は「ここまで野球をできたのも両親のおかげ。両親に恩返しすること」と力を込めた。吉井主将は「何事も自ら考えて、黙々とまじめに取り組むタイプ」と信頼している。

2026年度東都大学 準硬式野球春季リーグ戦 中央大学戦績

4月4日	○中央大	6-1	帝京大
4月5日	○中央大	5-2	帝京大
4月20日	○中央大	9-1	東洋大
4月21日	○中央大	13-0	東洋大
4月28日	○中央大	2-1	日本大
4月30日	○中央大	4-0	国士舘大
5月3日	●中央大	2-4	国士舘大
5月8日	○中央大	4-1	専修大
5月10日	○中央大	8-1	専修大
5月12日	○中央大	7-2	日本大
5月15日	●中央大	2-7	国士舘大

※9勝2敗で2季ぶりのリーグ優勝



吉井愛斗主将(左)と田中元輝選手=多摩キャンパスで



陸上自衛隊石垣駐屯地は南西諸島防衛の要として2023年3月に開庁した

先島諸島の島嶼防衛の現状、 政策実施の在り方を学ぶ

石垣島でフィールドリサーチ

総合政策学部・籠谷ゼミ生 佐藤優衣さん、川久保勝晟さんに聞く

総合政策学部の籠谷公司准教授のゼミ生3人が2025年10月、先島諸島の島嶼防衛の現状を知り、政策実施の在り方を学ぶため、沖縄県石垣市の石垣島をゼミ合宿で訪れ、フィールドリサーチを行った。延べ4日間にわたり、海上保安庁石垣海上保安部、石垣市役所、陸上自衛隊石垣駐屯地で、それぞれの責任者から説明を受け、国の安全保障について当事者意識を深めた。ゼミ長の佐藤優衣さん（総合政策3）と、川久保勝晟さん（同）にフィールドリサーチを通して考察したこと、ゼミでの学修で糧となっていることなどを尋ねた。

国防は「地域の理解と協力が不可欠」

石垣島を訪れたのは、佐藤さんと川久保さん、武藤一瑠さん（総合政策3）のゼミ生3人。石垣海上保安部では国内最多の600人以上が勤務する海上保安部として、尖閣諸島周辺の領海警備に当たっている現状について説明を受け、専従の巡視船「なぐら」を見学した。石垣市役所では有事に備えて一定期間の避難を可能とする地下シェルターの建設計画や、石垣空港の滑走路延長の進展などについて話を聞き、石垣駐屯地では設備や装備品の見学のほか、地域住民とも協力して「守りながら、ともに生きる」という意識で活動していると説明を受けた。



石垣市役所にて



海上保安庁石垣海上保安部を訪問。巡視船「なぐら」を見学した

万が一の有事では石垣市役所が、直接安全保障と関わっている石垣海上保安部、石垣駐屯地と協力、連携することで防衛に関わる事態の円滑な進行を可能としていく。市役所でそう説明された佐藤さんは、「国防とは国家機関だけの問題ではなく、地域の理解と協力が不可欠だ」と気づかされたという。実際に現地で話を聞き、得られる情報量、情報質の違いを実感した。

海上保安部、駐屯地、市役所はそれぞれの立場で領土・領海を守ることに向き合っているが、台湾や尖閣諸島に近い石垣島は、リゾート地としての性格も色濃い。有事の際はマリンレジャーなどで訪れた観光客をいかに守るかといった対策も考慮されている。川久保さんは現地に行って初めて、想像以上に観光客が多いことと、観光・リゾートの地ならではの対策、取り組みの必要性を学んだという。

多角的に物事を見る重要性

防衛白書を輪読してから現地に赴いたという佐藤さんだが、輪読だけでは実感できなかったことに「有事が起こり得る場所に一番近いところ、第一線に位置しており、島外の国の機関などに協力を求める前に、迅速な対応、動きが何よりも大事だ」という気づきがあった。安全保障をテーマとして石垣島を訪れた川久保さんは、経済安全保障の重要性に焦点を当て今後のゼミ学修のテーマにするつもりで、とくに半導体供給網について研究を深めたいという。

佐藤さん、川久保さんの2人は、1年次に籠谷先生の基礎演習を履修した後、2年生から籠谷ゼミに在籍している。石垣島でのフィールドワークにあたっては、籠谷先生から「メモを数多くとってほしい。実際に現地で見て聞いて考えてほしい」と言葉をかけられたそうだ。

今回のフィールドワークを含めた、籠谷ゼミでの学びについて、佐藤さんは「知識や理論、歴史や背景への理解をベースとして、さまざまな角度から物事を見る重要性和、その



取材に答えてくれた籠谷ゼミ生の佐藤優衣さん(左)と川久保晟さん=多摩キャンパス

姿勢が身に付いていると思う」と意義を語り、「日常生活でも人の立場を^{おもんば}慮れるようになった」と続けた。川久保さんは「いろいろな知識、視点から学ぶ重要性や、自分で感じ、考えることで、学びへの姿勢が変わってきていると感じる」とし、「学修から得られるものが多くなり、勉強を楽しめるようになった」と話している。

籠谷ゼミ 石垣島合宿

2025年10月14～17日に八重山諸島の石垣島(沖縄県石垣市)に滞在し、島嶼防衛の現状、政策実施の在り方を学修するため、フィールドワークを実施した。14日に海上保安庁石垣海上保安部、15日は石垣市役所と陸上自衛隊石垣駐屯地を訪問。地域新聞社の八重山日報社と八重山毎日新聞社も訪問した。ゼミ生は2026年5月には台湾・台北市を訪問し、国立台湾大学の学生との合同ゼミにも参加した。



使い捨てカメラで撮影した一枚。(左から)相方さん、樋口さん、小山さん、奥平さん(写真はすべて「MANY Road」のグランプリ受賞作より)



「心のふるさと」描く 54秒の映像作品

福岡の「東峰村動画コンテスト」で
最優秀のグランプリ

国際情報学部・村田ゼミ生4人が受賞

国際情報学部の村田雅之教授のゼミ生4人が福岡県東峰村^{とうほう}に滞在し、撮影した映像作品が同村の動画コンテストで最優秀のグランプリを受賞した。「心のふるさと。東峰村」をテーマに募集されたコンテストで、受賞が発表されたのは2026年3月。動画作品は今後、東峰村の移住PR、観光振興などに活用されるという。受賞した4人のうち、代表の奥平成美さん(4年=受賞時3年)と、相方彩音さん(同)に受賞の喜び、制作上の苦労などを聞いた。

「多くの人に作品が届いた」 「学生時代の足跡に」

コンテストは30秒～3分程度の動画で、村内で撮影された作品が応募の対象。2025年11月に1泊2日で同村に滞在したゼミ生8人が、規定のハッシュタグをつけてInstagramに投稿する形でグループと個人で計4作品を応募し、「MANY Road」の名前でエントリーした奥平さんと相方さん、樋口萌さん（4年＝受賞時3年）、小山公那さん（同）の4人による54秒の作品がグランプリを受賞した。

受賞について、奥平さんは「レベルの高い作品が多く応募されていた中で、本当に驚きでした」と笑顔を見せ、「Instagramの再生回数も4500回に上り、作品が大勢の人に届いていることがうれしい」と話した。相方さんも「福岡に出かけて一から取り組んだ作品が評価された。楽しみながら制作し、学生時代の一つの足跡にもなった」と喜ぶ。2人とも、食卓を囲んだゼミ生がそろってカメラに笑顔を向けているシーンを「イチ押し」に挙げた。

滞在時間に制約があった中で、棚田や森林、星空といった村内で見える景色、8人が楽しそうに食事をする様子などを可能な限り映像に記録し、帰京後、奥平さんの原案（デモ映像）をもとに仕上げた。樋口さんはBGMの優しいピアノの音色にのせたナレーション、小山さんは景色を中心とした映像の撮影を主に担当し、相方さんは現地での撮影地選定に加えて編集にも力をそそいだ。

撮影ではスマホやデジタルカメラのほか、今では珍しくなった使い捨てカメラも使用した。ゼミ生の生き生きとした表情を写した使い捨てカメラの画像は、アナログ風の柔らかな質感をかもだし、相方さんは「“ふるさとっぽさ”を演出しています」と教えてくれた。相方さんはテロップをどのタイミングで表示させたりするかにも知恵を絞った。

見つめ直した自分自身のふるさと

制作の過程でもっとも苦心したことを尋ねたとき、相方さんは「単なる『ふるさと』ではなく、『心のふるさと』がテーマでした。東峰村は全く知らない場所で、テーマから何を求められ、どう解釈すべきかをまず思いました。私自身の『ふるさと』についても考えさせられました」と振り返った。作品制作と向き合うことは、4人それぞれが自分自身のこれまでの歩みや、ふるさとの存在について改めて見つめ直す、きっかけにもなったようだ。

奥平さんは「素材の映像が素晴らしかった。それに負けないような良い仕上がりにするための編集が一番大変でした」と語った。指導する村田教授からは「楽しかった思い出の記録にとどまらないように、見た人にメッセージが伝わる映像を」とアドバイスを受けた。応募期限の大みそかまでの数日は4人がLINEで連絡を取り合いながら、連日、編集作業に没頭した。奥平さんは「（滞在は）楽しくて忘れ

受賞作品のナレーション

私には、
「ふるさと」と呼べる場所がない。
生まれた場所も、育った場所も
違うから。

でもある日、
大学の仲間と訪れた村で、
透き通った空気、
斧で薪を割る音、
爽やかなかぼすの香り
心温まるうどんの味
初めて見た
流れ星。

一緒に味わったら、
生まれた場所も、
育った場所も、
別々なはずなのに、
自然と、
「ただいま」
「おかえり」
って、言い合ってた。

また帰りたくなる場所を、人は、
「ふるさと」
と、呼ぶのかもしれない。
心のふるさと。東峰村

「MANY Road」の
グランプリ受賞作品は
こちらから
ご覧になれます。



東峰村

福岡県中央部の東端に位置し、大分県日田市と隣接する。村ホームページによると、日本棚田百選の棚田をはじめとする美しい風景に心を癒される人口約1700人の小さな村。面積の約86%は森林原野で、標高500～900メートルの急峻な山地も広がる。窯元も村内に点在し、「清らかな水が湧き、のどかな里山の風景が広がる焼物の里」とうたっている。

れない2日間になった。だれのふるさとにもなり得る場所と感じたからこそ、『行きたいな』ではなく、『懐かしいな、帰りたいな』をコンセプトにしました」と、作品に込めた思いを話している。



【日本ーオランダ】前半、ドリブルで攻め込む渡辺剛選手(手前)＝米国ダラス



女子棒高跳びで、4メートル50の日本新記録をマークした諸田実咲選手
＝2026年5月10日、大阪・ヤンマースタジアム長居



男子3000メートルで7分38秒98の日本新記録で優勝した森風也選手(手前)＝
2026年5月17日、東京・MUFGスタジアム



【日本―スウェーデン】後半、相手と競り合う渡辺剛選手(左)＝米国ダラス



卒業生が
躍動

ワールドカップ出場& 陸上日本新記録を樹立

サッカー日本代表 渡辺剛選手(2019年経済卒)

陸上女子棒高跳び 諸田実咲選手(2021年法卒)

陸上男子3000メートル 森風也選手(2022年経済卒)

渡辺選手

中大出身3人目のW杯代表

卒業生が目覚ましい活躍を見せている。サッカー部OBの渡辺剛選手(オランダ・フェイエノールト、2019年経済卒)はディフェンダー(DF)として日本代表に選出され、6月のワールドカップ(W杯)に出場した。グループステージでオランダとの初戦に先発、スウェーデンとの第3戦では後半途中から出場し、ピッチで躍動した。

中央大学出身者としては、2010年南アフリカ大会の中村憲剛選手、2022年カタール大会のシュミット・ダニエル選手に続く3人目のW杯日本代表となった。

諸田選手

自身の記録を2年7カ月ぶり更新

女子陸上競技部OGで女子棒高跳びの諸田実咲選手(アットホーム、2021年法卒)が5月10日の日本グランプリシリーズ・木南道孝記念大会(大阪・ヤンマースタジアム長居)で、

4メートル50の日本新記録を樹立して優勝。自身の持つ4メートル48を2年7カ月ぶりに更新し、秋に愛知県で開催されるアジア大会派遣設定記録もクリアした。

2025年5月の大会で負傷し、同年9月の世界陸上では本来の力を発揮できなかったが、今回で3度目の日本記録更新という快挙だった。

森選手

3000メートルで12年ぶり記録更新

陸上競技部長距離ブロックOBの森風也選手(Honda、2022年経済卒)は5月17日のセイコー・ゴールデンラブリ(東京・MUFGスタジアム)男子3000メートルで、日本記録を12年ぶりに更新する7分38秒98で走り優勝した。従来の日本記録は大迫傑選手の7分40秒09(2014年)。

3位までが日本記録を更新する白熱のレースとなり、森選手は見事なラストスパートをみせて先頭でゴールした。

(40～41ページの写真はすべて共同通信社提供)